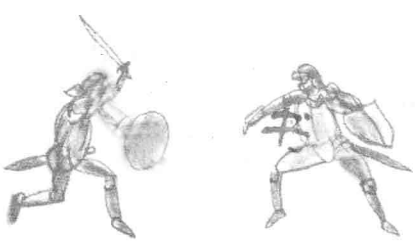
非命の宰相

原　敬・高橋是清・近衛文麿

続激流百年

松浦行真 著



サンケイ新聞社

非命の宰相

続激流百年

原　敬
高橋是清
近衛文麿

松浦行真（まつうらぎょうしん）著

検印省略

昭和44年10月10日発行

定価　五八〇円

発行者　竹内　格
発行所　サンケイ新聞社出版局
東京・中央区江戸橋一の七（103）
大阪・北区梅田町二七（530）
印刷　株式会社　堀内印刷所
製本　田中製本印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

© 1969 松浦行真

目次

宰相の門　原　敬　3
風と涛と　高橋是清　141
落日のとき　近衛文麿　307
あとがき　440

装幀
さしえ　風間

完

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

宰相の門

原（はら）　敬（たかし）

ひとやま百文

ふで一本

流れる

知　己

男ざかり

政友会

霞の奥も

ひとやま百文

明治十年ごろの東京には、すでに数校の官立学校があったが、そのひとつに、

――司法省法学校。

というのがある。明治五年の創立で、この前年までは、明法寮、とよんだ。司法官を養成する、日本最初の法律専門学校である。

いまでも、国立校の学費は、私学にくらべるとばかばかしいほどに安いが、明治初年の官立学校は、学費がただのうえに、食費からこづかいまで、くれた。

たとえばこの司法省法学校だが、月に食費を四円五十銭、こづかいを一円五十銭くれた。なにしろ米一升が五銭の時代だから、これはいまの二万二、三千円にも相当しようか。

まだある。

この法学校は全員寄宿制になっており、洋服から下着、くつ、ふとんにいたるまで、支給してくれる。ご一新により失業した士族の子弟にとって、これは、とほうもない魅力といってよかった。

原敬（たかし）は、明治九年、この学校を受験した。

かれの書き残した「入校紀事」という手記をみると、募集人員百名にたいし、

——志願せし者およそ二千名ばかり。

とある。

この考査がまた変わっていた。

願書といっしょに、学業履歴書、というのをだす。つまり、藩校や町の私塾、あるいは個人教師についた経歴などを書くわけである。

どういう仕かけなのか、受験する前に、この学業履歴書で、千六百五十人が落ちた。

原敬は、のこった。

入試問題は、二題でた。

中国の史書から選んだ文章に句点をつけるのが一つ。もう一つは、論語の一章の解釈である。原はいずれも、時間をたっぷり残して、早々に答案をだした。

が、結果にはあまり期待していなかったようである。というのも、かれはこの年の六月に、海軍兵学校をうけて、落ちている。

成績に自信はあったのだが、理由は、

——南部藩出身。

という以外に、考えられなかった。

南部藩は、戊辰戦争で賊軍にまわった藩である。当時は、薩長派、つまり官軍中のエリートが、どの分野でも肩で風をきっており、旧賊藩出身者は、何事につけハンディをつけられた。ばかりか、蔑視さえ、うけた。

たとえば、こんな話がある。

原敬がしばらく暮らしをともにしたある旧幕臣の子弟が、多くの志望者をぬき、横須賀造船所の技師養成所にはいったときのことだ。

ここの生徒はほとんどが薩長の子弟で、なにかというと、「賊が……」「賊が……」と嘲笑され、ついに耐えかねて退学した。

原敬はこの話を当人から聞いたとき、はらわたの煮えかえるのをおぼえたそうである。

かれが、法学校の入試にあまり期待しなかったのには、そういう背景がある。

が、ともかく、七月十日には発表を見にでかけた。

原は、二番で通っていた。

合格者掲示場での明暗は、今も昔も変わらない。パスした者は、いわば、出世の登竜門をくぐったわけである。

もっとも、竜となるか蛇尾となるか、それは学校だけではきまらない。

この法学校はのち、東京開成学校などと合併し、東京帝国大学法学部となり、六人の第一回卒業生を送りだすのだ

が、名をなした者は一人もいない。

その逆の場合が、原敬といえるかもしれない。この三年後、かれはかたくなに自分の信条を押し通したために、この法学校を棒にふるのである。

司法省法学校というのは、予科四年、本科四年の、八年制である。

卒業すると、法学士、という学位をくれることになっていた。学位といえば、いまでは博士のことをさすが、当時はまだそういう称号はなく、それができたのは、ずっとあとの明治二十年である。

法学校に入学してまもなく、原敬は、

『時務は八年間、投げすてざるを得ず』

と郷里の友人に書き送っている。時務とは、幕末から明治にかけてよく使われた言葉で、わかりやすくいえば、政治を論じ、かつ行動するというほどの意味である。

当時の書生、なかでもとくに士族の子弟たちは、天下国家を論じ、行動することがひとつのつとめと考えるような、そういう風潮が、そのころにはあった。

たとえば、原敬が法学校に入校した翌年に西南の役が起こっているが、後年、原の政友となったり、政敵となったりした犬養毅は、このとき慶応義塾を休学し、報知新聞の従軍記者として、西南の戦場におもむいている。

犬養はこの従軍で、

「軍人ほどおもしろいものはない。生命をもとでに出世ができる」

といい、熊本鎮台司令官の谷干城に軍人になりたいと申し出、谷から、

「いまさら学業を中途でやめるなどと、もったいないことをするな」

とさとされ、断念したという挿話がある。

原敬が、時務は投げ捨てざるを得ず、といったのは、犬養とは逆に、勉学に専念する、という意思を表白したものであろう。

事実、かれはそうした。さきにちょっと引用した「入校紀事」につづいて、原敬は「在校紀事」というのを書き、じつに克明に、試験の成績や席次を記録しているが、それによると、十点満点のうち、十点と六点が一回ずつあり、他の大半は九ないし八点である。もっとも、なかには、

『十二月十五日　仮試業あり、余　』

とだけ記述し、いつもなら、「何点を得たり」と書き続ける部分が空白となっている個所が一つだけある。

忘れたのか、返してもらった答案をなくしたのか。

それとも。

じつは原敬は、その生涯を通じて、つねに寸分のすきもない服装を身につけることを好み、この法学校時代にも、官給の洋服などはめったに袖を通さず、旧幕時代の南部藩の武家の作法どおり、和服に角帯、白たびで押し通した。

当時の書生には――これは戦後の学制改革で旧制高校がなくなるまで続くのだが、一種の粗暴というか、蛮カラを誇りとする気質があった。へこ帯をしめ、木綿のはかまにほおばの下駄をはく、という風俗だが、これは維新後、薩摩人が東京へ持ちこんだもので、当時の流行でもあった。

が、南部藩の家老の家格の出である原敬は、その流行には目もくれず、上流武家の風習を固守した。

してみると、原のおしゃれは、気位とほこりの高い精神と無関係ではなかったように思われる。

かれが、十二月十五日の試験の成績を空白としたのは、じつはその誇り高い精神が、意外の不出来な点数を、書くにしのびなかったのではなかろうか。

原敬は、大変なてれ屋だったらしい。かれを知るほどの人は、みなそれを語っている。

この法学校時代にも、そういう挿話がある。

たとえば、「焼芋買ひの記」という原の手記である。

この手記にかんしてだが、かれは、のちに「原敬日記」の名で知られる、じつに三十八年間におよぶぼう大な日記を残している。昭和二十五年にこれが公刊されたとき、世人はその史的価値とともに、それだけの長いあいだ日記を書きつづけたかれのきちょうめんさに、驚嘆した。

もっとも、はじめの数年間は、とびとびに書かれている。その空白を埋めてくれるのが、前記の断片的な手記類である。

さて。その「焼芋買ひの記」。当時、寄宿生のあいだでは、試験の点数に比例して金をだしあい、やき芋を買うことが流行した。

ある雪の朝、原がそれを買いにゆく番にあたった。そのころ法学校は、寄宿舎もひっくるめ、司法省の構内にあった。いまの東京駅の東側、鍛冶橋のへんで、原はそこから呉服橋のやき芋屋へゆき、大ぶろしきにいっぱい買いこんで帰ってきた。ところが、

『門を入る時、加太邦憲の退出するに会いたり。きまり悪く、狼狽して（包みを）わきにかかえたるに、わき腹は熱くしてたえられず……芋のにおいもはなはだし。加太、微笑して過ぐ。余も赤面して早々に玄関に駈け入りたり』

二十歳すぎた書生が、たかがやき芋ぐらいで赤面するとは、どうしたことであろう。

それにまた、なぜこのような瑣事を、わざわざ手記にま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

で書き残したのであろうか。

原は、精神の誇りを大切にした人物だ、と前に書いたが、かれの狼狽には、この気位の高さと、例のてれ性というか、はにかみ性というか、それらのいりまじった微妙な心理が、感じられる。

原は含羞の思いにたえず、手記に書くことで、それを発散させたにちがいない。

この人物は後年、剛直で、力の宰相と評されるのだが、じつはその内側はなかなか複雑で、繊細な感性の持ち主であったようである。

法学校時代の原敬は、どこか老成したふうがあったという。

議論ずきではあったが、むだ口はあまりきかず、どうでもいいことには、ただ微笑し、だまってみているというふうであった。

入学して三年目、いわゆる蛮カラ派の連中が、

——賄征伐。

というのを始めたときが、そうであった。

食べもののうらみはこわい、というが、この賄征伐というのは、当時の寄宿ずまいの書生がよくやった騒ぎで、いわば一種の青春の発散である。

法学校寄宿舎では、一人一か月四円五十銭の献立てで、朝はパンにスープと卵、昼は洋食一品、夕食には魚のつく和食で、学生としてはかなりぜいたくなものであったというが、それがしだいに、質、量とも落ちてきた。

なにしろ、食いざかりの連中である。

「こぎゃんことでは身が持ちもさん。ひとつ賄退治をやりもすか」

と、薩摩出身の秋月左都夫という男がいいだした。この秋月は、のち、司法省でなく外務省にはいり、駐ベルギー大使となった人物である。

秋月左都夫の提唱に、たちまち二十人ばかりの共鳴者ができた。

そのなかに、福本誠（日南）、加藤恒忠、陸実（羯南）、などといった生徒がはいっている。のちに、福本はすぐれた史伝家として、加藤は清潔淡泊な政治家として、陸は明治の代表的な新聞人として、いずれも名をなした人たちである。

この賄征伐というのは、どこの寄宿舎でもやりかたは大体きまっていて、たいてい日曜の夜におこる。

というのは、日曜日は外食して帰ってくる者が多い。炊事係もそこを心得て、頭かずより少ない食事しか用意していない。そこをねらって、全員がしめしあわせ、食堂に殺

到すると、飯はない、おかずは足りぬ、という始末になり、炊事はたちまちてんやわんやにおちいる、という仕かけである。

前記の二十人が中心となり、同志をあつめ、わざとおそく帰り、食堂を急襲した。

おどろいたのは炊事係で、

「もう飯もおかずも、なか」

という。この炊事係は薩摩人で、じつは校長の植村某も同じ薩摩の出である。生徒たちはこの二人を、

——芋づる。

とよび、食事の質が落ちたのは、芋づるが共謀して生徒の食費をピンはねしているからだと、疑っていた。

賄征伐の動機の一つは、これであった。

二、三十人の生徒に詰めよられて青くなっているその芋づるの炊事係に、

「いかに官費の学校じゃちゅうて、生徒のはらを干ぼしにしてまで学問せいとはいわんじゃろがなもし」

と、松山出身の加藤がいうと、

「なか袖はふれもはん。本夕のところは休食でごわす」

「なんばいうとるか。あそこに米びつばあろうが。あれを炊きゃよかたい」

と、これは筑前福岡出身の福本。それをうけて、津軽生まれの陸が、

「そうだべ。あれさ炊けばすぐすむこったべ」

「左様なばかはなりもはんど」

みな気がたっているので、お国言葉まるだしとなり、うるさいことになってきた。

炊け、炊かぬ、と押し問答をしているうち、皿を割るものがでてくる、テーブルをがたがたいわせるものがある、という始末で、しだいに熱気をおびてきた。

とうとう炊事係が恐れをなし、

「しからば炊きもすが、おいは知りもはんど。こんごつ無法は許されることではごわへんど」

ぶつぶついいながら、炊きにかかった。

このときの模様を、福本日南がのちに、

『夜半十二時ごろカン〳〵とラムプを輝やかし、賄を征伐して、ついに第二の晩さんをもよおし、人びと快哉を叫びつつ馬食せり』

と、書いている。文字どおり、馬のごとく食ったことであろう。

原敬は、この賄征伐に、参加していない。

原は、こういうどうでもいいような、しかも秩序のない騒ぎは、むしろ不快に感ずるたちであった。国分高胤が、

「原君、とうとう賄を退治よった。まんずきみもめし食い

に行かんかね」
と知らせにきたときも、「そうかね」と微笑しただけで腰をあげようともしなかった。国分は仙台の出で、のち青厓と号し、明治大正の漢詩壇の第一人者となった人物である。が、この賄征伐はこれからが大騒動となる。

炊事係の注進で、賄征伐の全貌がわかると、学校では首謀者二十人を処分した。
——二週間の禁足を命ず。
というもので、つまり外出を禁ずるという。
原敬はこれを知ったときも、沈黙をまもっている。というより、なんの関心も示さなかった、というほうがただしいかもしれない。
ところで、植村という校長は、気のいい単純な頭の持ち主だったらしい。二、三日たつと、禁足者全員をよびだし、
「どうじゃ。悪いと気がついたか。気がついたのなら、禁足は取り消してやろう」
椅子にふんぞり返って、いった。
みな、だまっている。
すると、福本日南が、一歩まえへ出、
「命令ですから、処分には従います。しかし悪いことをしたとは思うておりません」
「なんじゃとォ」
と、これで校長の顔色が一ぺんに変わった。
「学校の処分に心服せんちゅうのか」
「はい。心服しませぬ」
「ほかにも心服せぬ者は手をあげてみい」
秋月左都夫、加藤恒忠、それに坪根直吉という生徒が手をあげた。
「しからばおはんらは学校を非難する気か」
「それは問題が、ちがいます。——」
と、ここではしなくも大激論がはじまった。
が、なにしろ後年、口と筆で一家をなした者ばかりである。いも校長とでは戦さにならない。言葉につまった校長は、もっぱら権力をかさに、あたかも号令をかけるがごとく、「心服せよ」「心服せよ」とどなり散らす。
それをまた丹念に一つずつやりこめ、
「わしらは学校に一歩ゆずって、わざわざ処分に服しておるのです。それを心まで服せよとは、ちとむりでありましょう。この理屈がわかりませぬか」
これでとうとう校長は頭にきて、
「よし。貴様ら四人は保証人あずけじゃ。ただちに寄宿舎を退舎せえ」
ということになってしまった。

このときの校長のようすを、福本は、
『薩摩ッポの頑固なること鉄のごとく』
と、書きのこしているが、とにかく宣告が出た以上はしかたがない。夜中というのに、福本、秋月、加藤、坪根の四人は、荷物をまとめて寄宿舎をでた。
この顚末は、すぐさま全生徒の口から口へと伝えられた。
これまでこの事件について何もいわなかった原敬が、これを聞いてすわりなおした。
「国分君――」と、のちの漢詩の大名人をつかまえ、
「これは、許せません」
といった。日ごろ沈黙をまもっていた男が、顔かたちばかりか、言葉まで改めていうのだから、なんとなくすご味がある。
「国分君。われわれ生徒は学校の規律にしたがう義務があるが、しかし、いかなる人間によっても心の自由まで束縛されるいわれはない。それを処罰するとはもってのほかです」
「そりゃ君のいうとおりじゃ」
「校長に心服する、せぬは、われわれの自由です。ぼくは取り消しを校長に説得し、だめなら司法卿（大臣）に直訴してでも、取り消させてみるつもりです」
と、原はいい、
「国分君、きみはぼくの趣旨に賛成するか」
と、いった。
――南部の鮭は鼻まがり。
ということわざが、岩手にはある。反骨の精神と、いちどいいだしたらあとへは引かぬ強情さをいったものであろう。
原敬が、この〝南部のさけの鼻まがり〟であった。
といって、猪突し、孤独な反骨人となるようなまねはしない。原は後年、政友会をひきい、しばしば自己の政策を強情に推し進めたが、その場合も、事前に必ず緻密な手を打ったうえで、それをした。
この、賄征伐の副産物ともいえる心服問題で立ちあがったときも、そうであった。
「心の自由まで束縛される理由はない」
と説き、まず国分高胤と陸実を同志にし、
「こんどは、賄征伐のようなチャチなことではいかん。全校生徒を同志にしよう」
といい、三人で各部屋をまわり、遊説した。
訴えるポイントはただ一つ。
――心の自由。
である。

ところで、当時の若い書生に、この自由という言葉ほど、渇いたのどをうるおすような魅力ある言葉もなかった。なにしろ、

——薩長にあらざれば人にあらず。

というご時勢だ。すでに自由民権運動は燎原の火のように広まっており、自由という言葉のウラには、薩長の専制政府への反感のひびきがこもっている。

原敬は、全生徒をうって一丸とするのに、そう手間はかからなかった。やがて陸実の、

「交渉委員を選ぼうではないか」

という提唱で、原のほか河村譲三郎、吉田義静の三人が委員になった。

まず校長に、福本日南ら四人の退舎取り消しを談判した。当然、これはモノにならない。あとは予定どおり、司法卿への直訴だ。

当時の司法卿は大木喬任で、旧佐賀藩士である。江藤新平、副島種臣、大隈重信ら佐賀三人男が下野したのちも、最後まで明治政府に残っただけあって、大木には鋭さはないが、温厚篤実というとりえがある。

大木司法卿には、数回目に会えた。

大木は、みなの陳情を聞き終わると、

「あのな。育するに愛と徳と敬をもってするというじゃろ。きみたちは生徒じゃ。先生にたいし敬を忘れちゃいかん。敬を忘れねば、心服はできるはずじゃ」

もっぱら漢文の解釈みたいなことをならべて、原敬ら三人をけむにまいた。老練、というのはこういうのをいうのであろう。

原は、失敗したと思った。

が、大木は生徒たちをたしなめた一方、校長をよび、

「若い者が元気のあまりやったことじゃ。おんびんに処置してやるがよい」

温情のこもった取り計らいをした。

このツルの一声で、四人の退舎が取り消しになった。

大木らしい手である。

『原敬一代の政治運動の第一歩は、この賄騒動の善後策の成功であろう』

と、のちに福本日南が書いている。

生徒たちが快哉をさけんだことはいうまでもない。

が、校長は面目まるつぶれだ。

いも校長はこのことを、忘れなかった。

予科三年の、春の大試業が終わった直後のことである。

——左のもの、退校を命ず。

というはりだしが出た。十六人ばかりの名が、書きつら

ねてある。
おもに、賄征伐と心服問題の関係者である。
福本誠、陸実、加藤恒忠、国分高胤などの名がみえる。むろん、原敬もはいっていた。
（いも校長め、さては江戸の仇を長崎でうったか）
とは察せられたが、学校側は、理由もいわずに十六人をぬき打ちに放校したのである。
しかし、みなは文句もいわずに、あっさり退校した。ひとつには、福本日南によれば、石頭で不徳ないも校長のもとで勉学するのをいさぎよしとせず、いずれ学校に三下り半をつきつけてやろうと、退校同盟を結んでいたからであるという。
生徒が学校に離縁状をたたきつける同盟というのもおかしなものだが、こういう辻つまの合わぬ一種の反骨の気概は、当時の書生に共通した気質であった。それが、かれらの青春であった、といってもいい。
退校と同時に、学校では帰郷旅費として、金六円ナリをくれた。手当ての一か月分だ。
原敬は、陸、加藤、国分と四人で、ひとまず、京橋区新肴町（いまの中央区）の安下宿に落ちついた。
原はこのとき、最年長の二十四歳。
一同、別に、失望のいろもない。が、
「なんだな、いものやつに先手をうたれたな」
と、陸が苦笑している。国分は、
「なに、気にすることはない。頼まれても官吏なんぞには、なってやらんだけの話じゃ」
と、これはこっちから政府へ離縁状をだしたような気でいる。
この国分というひとは、生来、人の思わくなど余り気にしないたちだったらしい。
こんな話が、ある。――後年のことだが、碁が好きで、なにかというと山田奠南という友人のところへ行き、一晩も二晩も徹夜で碁をうつ。山田は喜んでいるが、つき合わされる細君はたまったものではない。
ある晩、ランプの油がきれたので、やむなく途中でやめて寝た。細君がこれにヒントを得、このつぎ国分がきたとき、ころをみて、
「また油がきれました。おやすみ下さい」
といったところ、国分は、
「いや、きょうは用意してきた」
ふところから百目ろうそくを持ちだしたので、がっかりした細君が思わず、尻もちをついたという。
余談はさておき、加藤が、薩摩出身の秋月左都夫が退校にならなかったことを話題にした。別にうらやんだわけで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.